

## 別れと出会いの季節のなかで

春日井 敏之(本学教職研究科教授、臨床教育学)

3月から4月は、冬を耐えた樹木や草花が一斉に芽吹き、満開の桜が新しい門出を祝福してくれる季節です。しかし、新しい出会いの前には、慣れ親しんだ仲間との別れがあります。そこをしみじみと味わう間もなく、追い立てられるように新年度が始まってしまいます。

いじめ問題への対応に一緒に取り組んできた教育行政、市行政の方々からも、異動のご挨拶をいただいたのですが、ゆっくりと振り返ってお礼のメールをしたための余裕がなかなかなく、静かな深夜に返事を書きました。

周囲の環境の変化が先行し、身体はそこにあるけれども、心は後から一生懸命追いかけてくるような感覚に囚われます。春は、新しい出会いのなかで元気をもらいながら、実は心身の調子が一番崩れやすい季節だと思うのです。みなさんの調子はいかがでしょう。

このように、大人でも調子を崩しやすい時期ですから、特に、新しい環境に馴染むのに少し時間がかかる子どもにとって、新学期は希望に胸をふくらましつつも、結構エネルギーを要するつらい季節かもしれません。だからこそ、いきなりエンジン全開ではなく、慣らし運転から始めましょう。そのために草花は小さな花をつけ、桜は咲いて一息入れるひと時をくれているのかもしれませんが。

私は、2001年度から2018年度まで文学部教育人間学専攻に所属し、途中5年間は大学院応用人間科学研究科と兼任し、2017年度に開設された教職研究科とも2年間兼任をしてきました。3回生、4回生ゼミは、それぞれ15名程でしたが、毎年4月の3回生ゼミでは仁和寺へ、4回生ゼミでは龍安寺へとフィールドワークに出かけ、桜を愛でながらお花見団子をいただき、一息ついて一年間を始めました。

しかし、コロナ感染拡大予防を理由に、2020年3月、私にとっては最後となった第16期学部専攻生との卒業式、及び第2期教職研究科院生との修了式は、すべて中止となってしまいました。いまだに思い残したものを抱えている自分があります。

しかも、例年の春とは異なる点が、今年は二つも重なって

起きています。私たち大人や子どもたちに大きな影響を及ぼしているのではないのでしょうか。

一つには、なかなか先の見えないコロナ感染拡大の問題があります。コロナ時代が3年目を迎えています。学生たちと桜を愛でながらお花見団子をいただいたり、食事会をしたりすることはなくなりました。お世話になり退職された同僚の先生方とのお別れ会もできていません。

この間、いくつかの自治体で、いじめ問題などに関わり、学校訪問をさせていただく機会がありました。先生方からは、「すぐにあきらめてしまう子どもが増えた」「マスク生活のなかで、子どもの言葉と感情がなかなか出てこない」「不登校の子どもや自傷行為をすることも増えている」といった声をよく聞きました。

二つには、毎日リアルタイムで映し出されるウクライナへのロシア侵攻の問題があります。平和な日常生活が突然の砲撃によって破壊され、多くの命が奪われるという理不尽な戦争は、日本、世界の子どもたちの目には、どのように映っているのでしょうか。感性豊かな子どもたちや日常生活で傷ついている子どもたちの心が、さらに傷つくような事態を危惧しています。「地球市民」として、私には、何かできるのかと問いながら、様々な感情が錯綜して、悶々としている自分があります。

コロナ時代のなかで、オンライン会議も定着してきました。そのなかで、効率性の促進に拍車がかかり、一見無駄に見えるけれども大切なこと、たわいもない会話や笑顔を交わすことなどが、捨象されてはいないのでしょうか。規格品としての商品を生産するのではなく、生身の人間を育てるという教育、子育てという営みは、たいへん手間のかかる仕事です。育てている側の教師や親も育てていく必要があるために、二重に手間がかかり厄介なのです。そこでは、無駄に見えるようなことやたわいもないこと、失敗や葛藤といった経験が、実はとても大切なことであったりします。

別れと出会いの季節のなかで、悶々としていることも無駄なことではないと思っています。